

CEFR-J x 27: CEFR-J 開発・利用の経緯と多言語利用

CEFR-J x 27: Development of the framework and its multilingual applications

投野 由紀夫
Yukio Tono

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies (3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

要旨: 本稿では、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) を日本の英語教育に適用した CEFR-J というプロジェクトを紹介し、CEFR を各国・地域の状況やニーズに応じてローカライズしていく具体的な方法や課題を考察する。また細分化したレベルに言語材料を配当していく参照レベル記述の科学的な手法を紹介し、CEFR の枠組を具体化するためのさまざまな試みを紹介する。最後に東京外国語大学が行っている CEFR-J の多言語利用のプロジェクト CEFR-J x 27 について解説し、多言語化の意義や課題を考察する。

キーワード: ヨーロッパ言語共通参照枠, 参照レベル記述, 多言語プロジェクト

Keywords: CEFR, Reference Level Descriptions, Multilingual project

1. はじめに

本稿では、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) を基に日本の英語教育の一貫した目標設定と言語材料整備のために整備された CEFR-J (投野, 2013) というプロジェクトを紹介し、CEFR を各国・地域の状況やニーズに応じてローカライズしていく具体的な方法 (利用環境整備、言語資源整備など) を提案する。また最後に東京外国語大学で現在実施されている CEFR-J を利用した多言語教育・評価プログラム「CEFR-J x 27 プロジェクト」の概要を紹介する。まず CEFR 構築とその適用の研究の歴史的経緯を見る (2.)、続いて CEFR-J の構築方法 (3.)、CEFR-J の活用度を高める関連研究と資料構築 (4.)、CAN-DO ベースのタスク・テスト開発 (5.)、最後に CEFR-J x 27 プロジェクトの紹介 (6.) を行う。

2. CEFR 構築とその適用の研究

CEFR は欧州評議会の外国語教育政策部門で永年にわたる研究の成果として 2001 年にまとめられたものである。1970 年代の Threshold Level (van Ek, 1974) が CEFR の発達の源流といえる著書である。これは、英語圏にきた移民がある程度語学習得を終え、社会的に自立した外国語使用者として生活をする時に、英語でどのような知識や技能を身につけているか、ということを一覧化したものである。枠組には言語中立を意識して、文法構造ではなく、機能 (function) と概念 (notion) という言葉の意味を中心に据え、それに詳細にカテゴリーと言語表現・語彙を付与して言語材料一覧を作成したものである。これがフランス語、ドイツ語などに多言語化していき、同時に英語に関してはケンブリッジ大学の英語テスト構築部門がその上下のレベルを欧州評議会と共同でテストを作成し具体化していった。

この Threshold Level から発生した言語習得段階のモデルが、EU という統合母体を得て 1990 年代から徐々に個別言語の目録のような状態から共通枠組へ整理しようという試みがなされ、その中で Brian North が中心となって、能力記述子 (illustrative descriptor) の項目困難度の特定という手法を開発し、言語